



第3章

古代から中世までの キリスト教

1500年に及ぶ古代・中世のキリスト教史上には無数の出来事と人物が歴史を彩っていった。本章では、そこから欠かすことのできない出来事と人物を最小限にまで厳選して示す。



学校で教えない教科書



面白いほどよくわかる

キリスト教

イエスの教えから現代に生きるキリスト教文化まで

北海道大学大学院教授 藤女子大学教授
宇都宮輝夫・阿部 包 共著

2008

日本文芸社

グノーシス主義

キリスト教の成立過程（とりわけ二〜四世紀）において、後の正統信仰の対場からは異端として敵視された人々の思想や思想運動が、「グノーシス主義」あるいは「グノーシス」である。

キリスト教の異端としてのグノーシス主義

「グノーシス主義」や「グノーシス」という言葉の用法について、専門家の間では細かい議論があるが、そのポイントの一つは、この思想・思想運動を、キリスト教成立期という特定の時代に起こった歴史上の個別事象にとらえるか、歴史や時代に関係なくいつでも起こりうるある種の普遍的な思想・思想運動にとらえるか、ということにも関連している。たとえば、学者によつては、ユング（一八七五〜一九六一）の心理学など現代の思想にも、「グノーシス

主義」的ないし「グノーシス」的なものを認めようとする。この場合は、「グノーシス主義」や「グノーシス」という言葉は、キリスト教の異端という意味合いを直接には含んでいない。

キリスト教のいわゆる異端としての「グノーシス主義」、あるいはキリスト教「グノーシス」については、従来は、エイレナイオス（二世紀後半）やヒッポリュトス（一七〇頃〜二三五、六）、エピファニオス（三一五頃〜四〇三）、といった「反異端論者」と呼ばれる古代の教父たちの文書から、偏った形で（つまり異端というラッテルを貼る立場

から）間接的にしか知りえなかったが、一九四五年にエジプトで発見された「ナグ・ハマディ文書」と呼ばれる四世紀頃の写本群によつて、その思想を垣間見ることができるようになった。「垣間見る」としかできない理由は、それらの文書が、いわば内部文書であり、部外者に自分たちの教義なり思想なりをわかりやすく説明しよう、などとは意図されていないからである。つまり、それらの文書は、グノーシス主義者のためのグノーシス主義者による文書なのである。

いずれにしても、そういった「グノーシス主義」ないし「グノーシス」という用語は、その多くが初期のキリスト教となんらかの関わりがある幅広い宗教的集団に当てはめることができる。そういった宗教運動は二世紀頃に非常に盛んになり、その信奉者たちは、真の神によつて創造されたのではないこの

邪悪な物質世界から救済されるために、特別な「知識」というものを強調したのである。「グノーシス」とはギリシャ語で「知識」、「認識」のことであり、それゆえ彼らは「グノースティコイ」（「グノーシス主義者たち」ないし「グノーシス者たち」と呼ばれたのである。

グノーシス主義の基本思想 邪悪なこの世からの救済

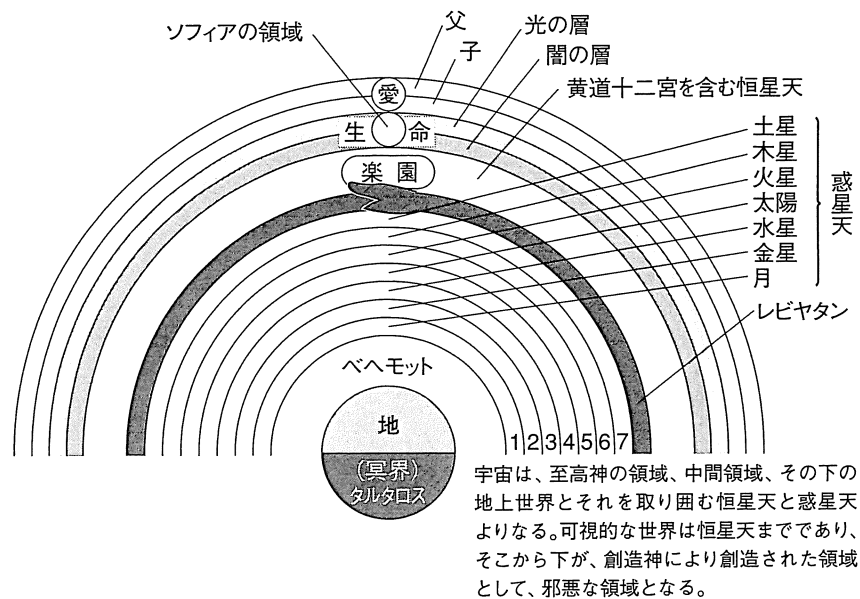
グノーシス主義の思想は、先に述べた理由で、簡条書きのないし教条的な文書によつてではなく、時にグロテスクとすらいえる複雑な神話的表象によつて表現されており、その全貌を明確にとらえるのは難しいが、彼らの思想のいわばアウトラインをある程度抽出することはできる。

彼らは、物質と霊とを対立させる二元論者であり、邪悪なものときされる物質の領域であるこの世も邪悪

第3章

古代から中世までのキリスト教／グノーシス主義

【あるグノーシス主義集団のものとする宇宙観】



造神を真の神ではないとするところから、彼らが聖書を解釈する場合、とりわけ創世記を取り上げることが多いのだが、それはいわゆる正統派の解釈に対して奇妙に逆転したものとなる。たとえば、グノーシス主義の考えでは、蛇は、真の「知識」を知らせる肯定的な役割を担っているのである（「アルコーンの本質」など）。

学者たちの間では、こういったグノーシス主義がたんにキリスト教から生じたのではないとすれば、その起源は何か、どこにあるのか、さらに、そういった問題と関連して、「ヴァレンティノス派」や「バシリデース派」、さらに「オフィス派」、「セツ派」、「バルペロ派」などといった、古代の教父によれば多数存在するとされるグノーシス主義者たちの集団の特徴や系譜が議論されている。

アルコーンの本質

「ナグ、ハマディ写本」13巻中の第2巻にあるグノーシス主義文書の1つ。「アルコーン」とはギリシャ語で「支配者」という意味である。

であると考える（「反世界的二元論」などといわれる）。真の神は完全に霊的な存在であり、したがって、邪悪な物質世界であるこの世を創造したのはその真の神ではない。この点が、唯一絶対の神が同時にまた創造神でもあるとするユダヤ教やキリスト教と大きく異なる。真の神は、しばしば「アイオン」と呼ばれる他の神的存在を生み出したが、それら神的存在の住まう神的領域（「プレローマ」＝ギリシャ語で「充滿」という意味）にある種の破綻が起こり、神的存在の一つ（しばしば「ソフィア」＝ギリシャ語で「智慧」という意味）がそこから離れて、別の神的存在を生み出してしまふ。これはしかし、神的領域の外にあるので邪悪な存在である。これが「デーミウールゴス」（「ヤルダバオート」などさまざまな別名がある）と呼ばれ、この存在が邪悪な物質世界を創造するのである。なんらかのしかたで真

の神的本質を備えた霊がこの世の物質世界にとらえられ、人間のなかに閉じ込められる。人間は、この自分の霊的本性をさとり、自分がどこからどのような来たのか、どうしたらもとの神的領域に帰れるのか、ということを知ることによって（これがすなわち「知識」＝「グノーシス」である）この邪悪な世界から解放され、救済されるのである。この知識を邪悪なこの世では獲得することができない。そこで、（キリスト教の異端としてのグノーシス主義では）キリストがこの「知識」をもたらすのである。したがって、グノーシス主義では、キリストは本来この世の存在でない以上、この世に現われたキリストは、真の肉体を持った人間ではなく、単なる幻である、といったような考えを唱える（「仮現論」という）。

ざっとこのような基本思想を持つグノーシス主義であるが、前記のようにユダヤ教・キリスト教の創

キリスト教の基礎をつくった人たち

三位一体論をはじめ、キリスト教の根幹にかかわる重要な教理の形成に大きく貢献したのが教父たちであった。彼らこそキリスト教の教えの父「教父」と呼ぶにふさわしい。

キリスト教の

重要な教理をつくった「教父」

こんにち、キリスト教の重要な教理とされているものの多くは、「教父」と呼ばれる人たちに負うところが大きい。この「教父」という言葉は、もともとギリシア語やラテン語で「父」を意味する言葉が教会用語として定着し、広く用いられるようになったものである。英語ではチャーチ・ファーザーズ（教会の父）という。だが、誰を「教父」に含めるのか、いつごろまでを「教父時代」とするのかという定義に関しては、全キリスト教界で合意がある

わけではないが、こんにち、プロテスタント、カトリックといった教派を問わず、この教父時代の成果は、肯定的であれ、否定的であれ、重要なものとして広く認識されている。それは、教父時代にいくつかの神学論争が起こり、その後の教理の発展にとって非常に重要な問題がさまざまな角度から論じられ明瞭化されたためである。

教父たちはギリシア哲学という異文化との接触もあり、哲学的な教養を身につけた人たちが多い。そのためギリシア哲学、とりわけプラトン（前四二七―三四七）の学説に精通していなければ、彼らの

著作を理解するのは難しい。また教会の東西分裂以降、ギリシア語圏である東とラテン語圏である西では、その神学的なアプローチや問題関心も異なるのだが、こうしたくりでは整理できないほど諸説乱立の時代でもあった。そのため教父時代の神学潮流を図式的に提示するのは困難である。

キリスト教神学の成立

最初期の教父たちの課題は、キリスト教とユダヤ教との関係をどのように把握するかに集中していた。しかしその後、キリスト教はさまざまな外部世界（異教世界）との接触を通して、自らの信仰を弁明・弁護する必要に迫られた。殉教者ユスティノス、オリゲネスがこの時期に属する。だがこの時代は、教会を取り巻く政治的な状況も予断を許さず、いつ迫害の波がふりかかってくるかわからない不安定な

時代でもあった。そのため、本格的な神学論争の幕開けは、初のキリスト教徒の皇帝コンスタンティヌス（二七二―三三七）の治世まで待たねばならなかった。この時期になると、神学者たちは、迫害を恐れることなく、重要だと思われる神学論議を公の場で論じることが可能となった。とはいえ、こうした神学討議を通じて合意を生み出すのは、至難の業でもあった。だがこうした論争を通じて、こんにちのキリスト教神学にとっても重要ないくつかの信条が採択された。キリストの神性・人性の教理、三位一体論は、そのなかでも最も重要な成果である（P 196―201、P 212―213参照）。多くの教父たちのなかでも、殉教者ユスティノス、リヨンのイレナイオス、オリゲネス、テルトゥリアヌス、アタナシオス、ヒッポのアウグスティヌス（P 80―85参照）がとりわけ有名である。

第3章

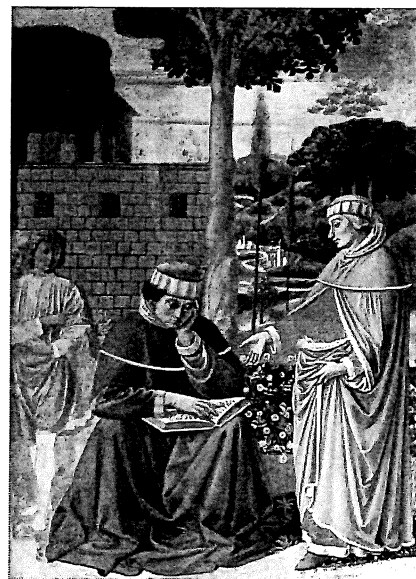
古代から中世までのキリスト教／キリスト教の基礎をつくった人たち

アウグスティヌス

キリスト教の基本教義の大部分を確固とし、キリスト教を現在あるような形にしている大主教。一人の人間としても波瀾万丈の生涯を送った。

自分のすべてをささげる 決断をした回心

アウグスティヌスは、三五四年、北アフリカのタガステ（現在のアルジェリア）に生まれた。思春期・青年期の彼は、内面に自己分裂を抱えて苦悩し、生きるべき正しい道を探し求めていた。一方で彼は、出世を望んでいた。出世するためには、修辞学^{II}雄弁術を身につけなければならない。彼は修辞学を修め、カルタゴと帝国の首都とみなされていたミラノ（当時はメディオラヌム）でその教師になる。彼は、皇帝ウァレンティニアヌス二世の統治二年目を祝う



アウグスティヌス回心の絵。こののち彼は、放埒な生活を捨て、神に一身を捧げることになる。

ト教へ改宗したいという熱望を持ちながらも、やはり性的快楽は断念しがたく、改宗に逡巡^{しんじゆん}していた。それゆえ彼はこう祈る。「わたしに純潔と節制とを与えてください。でも、今すぐにはありません」。

三八六年、ミラノの庭園にあるイチジクの木の下で涙にくれて瞑想していた彼の耳に、隣家から子供の歌う声が届いた。「手に取って読みなさい」。そこで彼は聖書を手に取り、偶然あけた「ローマ人への手紙」の一節を読んだ。「主イエス・キリストを着るがよい。肉欲を満たすことに心を向けてはならな

い」。己のすべてをささげる決断をした回心^{かうしん}のときは、彼の自伝『告白』のなかにこのように記されている。

ペラギウス主義との対決

アウグスティヌスには、具体的な論敵との対決のなかで自己の神学を展開する傾向がある。取り上げるべきは、ペラギウス主義とドナトゥス派との対決である。

ペラギウス（二六〇頃～四二〇頃）はブリタニア

アウグスティヌスの生涯

- 354年 北アフリカに生まれる。
- 360年頃 ペラギウス、生まれる。
- 370年 カルタゴで学ぶ。女と同棲し、翌年一子をもうける。
- 373年 キケロを読み、真理の探求に情熱をい込む。善悪二元論のマニ教に近づく。
- 384年 ミラノで修辞学の教師となる。
- 385年 皇帝ウァレンティニアヌス二世に頌詞をささげる。
- 386年 婚約。回心の体験。
- 388年 タガステに修道院を建て、修道生活を始める。
- 391年 ヒッポの司祭に叙される。
- 396年 ヒッポの司教になる。
- 398年 『告白』を書き始める（401年に完成）。
- 411年 ドナトゥス派を糾弾するカルタゴの会議。
- 412年 反ペラギウス文書『霊と文字について』を著す（この書はのちの若きルターに、絶大な影響を与える）。
- 413年 主著の1つ『神の国』を書き始める（426年に完成）。
- 430年 死去。

第3章

古代から中世までのキリスト教／アウグスティヌス

(英国) 出身の修道士で、人間の自由意志を強調し、原罪 (P 218 ~ 219 参照) の観念を斥けた。それゆえ彼によれば、キリスト教徒は絶えず罪に対して戦い、善行をなすべきであり、かつなすことができるのであり、それによって自ら救いを獲得できる。人間が罪に打ち勝つ力を持っていないなら、罪の言い逃れができるだろう。「神は不可能な命令を下すことなど望まれません。……また、手に負えないことで人間を責めたりしません」。

これに対してアウグスティヌスは、原罪がないなら、キリストの贖罪 (P 220 ~ 224 参照) もなかったことになると考ええる。あるいは、(こちらの表現のほうが適切なのであろうが) 神が人間となって人間の罪を贖わざるを得なかったということは、人間には自己救済の可能性がないのである。それゆえ、人間は、神の無償の恩恵によらなければ善行をなすこ

とはできず、救われることもない。アウグスティヌスにとって、人間の始祖アダムの墮罪の前には、人間は罪を犯すことも犯さないことも自由に選ぶことができた。しかし墮罪後は、罪を犯す自由しか残されていらない。したがって罪を犯すのをやめるという選択肢は人間にはない。キリストによる贖いののは、神の恵みが人間のうちに働き、人間は罪を犯す自由と犯さない自由の双方を持つことができる。そして終末において、人間は罪を犯さない自由だけを持つことになる。

神は恵みを与えることを

予定していた者に恵みを与える

さて、人間が神の恵みを受け入れるのは、人間の主体的決断によるのではなく、恵みの力そのものによる。神は恵みを与えることを予定していた者たちに恵みを与えるのである。こうした考えは、当然、

予定説に帰着する。

この論争は、二重の意味で興味深い。第一はペラギウス主義の普遍性である。ペラギウス主義は歴史上の固有の出来事ではあるが、これはキリスト教の発端から今日に至るまで、姿を変えながらも繰り返し出現してくる思想傾向であるのみならず、宗教史一般でも頻繁に現われてくる。人間が社会的存在である限り、自己のうちの利己的傾向と愛他的傾向の間の葛藤に苦しむ。その苦悩からの救済要求の一形態が、このペラギウス主義である。これは道徳主義的キリスト教理解であり、自力救済型宗教の典型である。教皇がペラギウスを糾弾したり、名誉回復したり、再度弾劾したりと、態度が右に左に揺れ動いたのも、この宗教性の持つ、人を惹きつける力のゆえだったのであろう。第二は、善行という功績によらない神の恩寵のみによる救済という考えが、

プロテスタンティズムの誕生に重要な役割を果たしたことである。さらには、アウグスティヌスの予定説はルターに引き継がれ、カルヴァンにも通じていくこととなる (P 126 参照)。

ドナトゥス派との対立

今一つ取り上げるべきことが、ドナトゥス派との対立である。この対立は、聖職に就いている元棄教者の行なう秘蹟は、ふさわしくない者が授けたがゆえに無効であるという、ドナトゥス派の主張に端を発する。問題がこじれたのは、それに政治的・経済的などの背景が絡んだからであるが、いずれにせよこの派は独自の分派を形成するに至る。

これに対してアウグスティヌスは、教会の聖性は人間の道徳的清さにあるのではなく、教会も地上にある限り罪にさらされているのであって、罪を犯す

第3章

古代から中世までのキリスト教／アウグスティヌス

人間に対する寛容を説いた。したがって彼自身も当初、異端であるドナトゥス派にカトリック教会への帰順を説得にのみよるべきであると考えていた。強制力の行使は無意味であるし、望ましくもなかった。しかし彼はこの立場を捨てる。というのは、彼は話し合いによる平和的解決に努めたものの、相手側の暴力によってそれは不可能になったからである。しかも、一部の過激ドナトゥス派は略奪行為に走るなど暴徒化した。

武力行使を正当化する聖書の根拠

これに対してアウグスティヌスは、暴力に対しては国家権力は秩序を守るために介入する権利を持ち、それゆえ彼らに対する武力行使は正当化されるという結論に達した。こうして正しい戦争と間違った戦争とがあり、正当な弾圧と邪悪な迫害とがある

ことになる。ここにはもう一つの理由が働いていた。

強制の有効性が経験的に明らかに思われたからである。法による制裁に対する恐れから、ドナトゥス派の人々がカトリックに改宗し、それを今や感謝していたからである。アウグスティヌスは、武力によって異端を真に改宗させられるとは決して考えなかったが、いわば威嚇の教育効果は信じ、異端者が真理を受容するのに物理力は役に立つと考えた。

武力行使容認は、彼にとって長く苦渋に満ちた抗争に由来し、胸の引き裂かれるような決断であったと思われる。とはいえ、彼がのちの異端審問や宗教的迫害の正当化のために重要な貢献をなしたことも否定できない。(この点での「貢献」でアウグスティヌスと同等なのは、ルター「この世の権力について」である。)

ちなみに、彼は強制力行使のための聖書の根拠を

「ルカによる福音書」14章

人を力づくで回心させてもよいということの根拠?

神の国を宴会にたとえて。ある人(神)が宴会に人々を招いていた。しかし彼らはいろいろ理由をあげて次々に断る。そこで彼は召使いに言う。通りに出て行き、「無理にでも人々を連れてきなさい」と。

「マタイによる福音書」13章

毒麦だとわかっているなら抜くべきであるということの根拠?

イエスがこの世に麦の種(=救われる人々)をまき、悪魔が毒麦の種(=悪い者たち)をまく。刈り入れ(=終末)には天使たちが両者を選別するが、それ以前に人間が毒麦を引き抜こうとすると、麦まで一緒に抜きかねない。それゆえイエスは言う。「刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい」。

持ち出す。それは、世俗権威が秩序維持のために行使する武力を容認した「ローマ人への手紙」13章であり、「ルカによる福音書」14章の「無理にでも彼らを連れてきなさい」という宴会のたとえであり、「使徒言行録」9章でのパウロの回心物語であり、「マタイによる福音書」13章の毒麦のたとえであった(上記参照)。「ローマ人への手紙」の解釈を除けば、あとのものはこじつけであり、最後のものは意味を逆転させてさえいる(聖書では、毒麦も育つに任せなさいと言われているのに、アウグスティヌスはこれを抜き去りなさいという命令として読む)。こうしたごく当たり前の批判さえ、実際になされたのは一七世紀のピエール・ベールを待たねばならなかったほど、彼の権威は確固としたものであり続けたわけである。

スコラ学とトマス

スコラ学の展開と、トマス・アクイナスの思想をたどりながら、その方法論と論点を見ていく。中世ヨーロッパで発展したスコラ学は、現代の学問のルーツでもある。

哲学と神学が融合した学問「スコラ学」

英語の「school」(学校)の語源である「スコラ的な」という形容詞は、紀元前から「学校の」「教養のある」などの意味で用いられていたが、一二世紀以降はとくに修道院などに付属する学校を指すようになった。スコラ学とは、これらの学校で展開された、哲学と神学が融合した学問およびその方法論で、広い意味ではキリスト教が社会の基盤であった中世ヨーロッパで発展した思想・考え方を指す。「スコラ学的」といえば、「細かいことにこだわる」

「学者ぶった」などというニュアンスもある。しかしそれも裏を返せば、スコラ学の担い手たちは、神学者であると同時に「(哲)学者」であり、学問(哲学)的課題にふさわしい方法を模索していたということでもある。スコラ学の試みに、私たちは現代の学問のルーツをたどることができるだろう。

客観的、理論的な議論を重視する

中世ヨーロッパの学校教育は「七自由学科」を基礎とし、授業では「講義」と「討論」の二つのスタイルがとられた。教師が一方的に行なう講義とは違

って、討論では、ひとつの命題について、教師と学生が互いに賛成と反対の論拠を挙げながら、徹底的に論じる形式が一般的であった。この際、個人の主観を徹底的に退け、権威ある伝統に基づいて議論することが求められ、アリストテレスの著作などから引用された命題集が好んで用いられた。スコラ学においては、学問的な伝統をふまえたうえで、客観的・論理的な議論が何よりも重んじられたのである。

一三、四世紀に最盛期を迎えたスコラ学

中世におけるスコラ学の展開は、初期・最盛期・後期の三段階に分けることができる。

スコラ学の初期(九〜一二世紀)にその基礎を築いたのは、新プラトン主義的立場に立つエリウゲナ、「スコラ学の父」アンセルムスなどである。アンセルムスの「知解を求める信仰」という言葉は、信仰

に基づきつつ、理性によって真理の解明を目指す、スコラ学の取り組みをよく表わしている。

一三〜一四世紀にスコラ学が最盛期を迎えた背景には、アリストテレス哲学の受容、大学の発展、修道会での学問的活動という二つの要因が考えられる。アリストテレス哲学は、アラビアにおけるアリストテレス理解が伝わったこと、またギリシャ語原典からの翻訳が完成したことで、決定的な影響力を持つようになる。修道会と大学との関係も緊密になり、ドミニコ会士であるトマス・アクイナスとフランススコ会士のボナヴェントゥラが、同じ時期にパリ大学の教授として活発で多産な活動を展開している。また、この時期の重要な思想家としては、スコラ学の批判的な統合を目指したスコトゥスや、神秘主義者マイスター・エックハルトなどが挙げられる。後期スコラ学(一四〜一五世紀)では、「唯名論」

プロティヌス(204/5~269/70)を祖とする哲学の一派。プラトンの思想を神秘主義的に理解し、靈魂の浄化による、絶対の〈一者〉であり〈善〉である神との合一を目指す。

新プラトン主義

七自由学科

中世の大学において教授された基本的な7つの学科。3学(文法・弁証法・修辞学)と4科(算術・幾何・音楽・天文)からなる。

第3章

古代から中世までのキリスト教/スコラ学とトマス

(すべての事物に先立つ普遍的なものは思考のうえ
でしか存在しない)の立場に立つウィリアム・オッ
カムなどが代表的である。

スコラ学最大の思想家

トマス・アクィナス

スコラ学最大の思想家といえば、トマス・アクィ
ナス(一二二五頃〜七四)である。

トマスは、ナポリで貴族の血をひく両親の末息子
として生まれ、五歳でベネディクト会修道院に送ら
れた。大学に入学後、トマスは家族の反対を押し切
ってドミニコ会に入会し、アリストテレス哲学を積
極的に取り入れたアルベルトゥスに師事する。

その後パリ大学の神学部教授となったトマスは、
教授団や修道士との論争に巻き込まれながらも、旺
盛な著作活動を展開する。ある記録によれば、当時
のトマスは肥満体で、頭は「その知性に応じて」大

きかったと伝えられている。また、トマスはもっぱ
ら口述筆記で著作していたが、それは彼があまりに
も悪筆だったためともいわれる。

膨大な著作を残したトマスであるが、晩年には、
ある日を境にいつさいの著作活動をやめたらしい。
その後まもなく、公会議に出席する道中で体調をく
ずし、死を迎えた。トマスの遺体を運んだロバも悲
しみのあまり死んでしまったと伝えられている。

トマスの著作と神学

トマスの主著と見なされるのは『対異教徒大全』
と『神学大全』である。キリスト教批判への反論で
ある『対異教徒大全』では、キリスト教信仰に基づ
く真理の主張が、すべての人間に共通する理性にか
なうものでもあることが示される。啓示において明
らかなる救済の真理は、理性によって到達できる

ものではないが、理性に矛盾するものでもなく、理
性を調和的に補い、完成するものであるとされる。

『神学大全』は、もともとは神学の入門書として
書かれた著作である。神についての認識へと導くこ
とを目的とした三部(神論、人間論、キリスト論)
からなり、それぞれの議論は、大学での討論と同じ
ように、問題(テーゼ)・異論・異論に対する反

トマス・アクィナス



彼の頭はその知性に応じて大きかったと伝えられる。

論・主文(解答)の順で構成されている。トマスに
よると、神とは原因と結果の連なりにおいて原因を
持たない原因で、この世に存在しているすべてのも
のの「存在」から、それらの存在の原因である神の
「存在」をさかのぼって認識できる(「存在の類比」)。
神は本質と存在との区別がない無限の存在であるの
に対して、この世に存在する他のすべてのものは、
神から存在を分け与えられた有限なる存在として規
定されるのである。

トマスの死後、一五世紀以降は『神学大全』の未
解決の部分が議論の対象となり、多くの神学者がト
マスの思想に取り組んだ。一八世紀の終わりには、
トマスの思想を近代の哲学と結びつける試みが登場
し、「新トマス主義」と呼ばれるその流れは現代に
まで及んでいる。

第3章

古代から中世までのキリスト教／スコラ学とトマス

アツシジのフランチェスコ

キリスト教で最も人気のある聖人の一人が、アツシジのフランチェスコである。時代も宗教も超えて多くの人に愛される、その魅力はどこにあるのだろうか。

「清貧」を徹底的に実践

イタリアのアツシジで、裕福な商人の家庭に生まれたフランチェスコ（一一八一／八二―一二二六）は、青年時代にある戦鬪で捕虜となり、肉体的にも精神的にも危機に陥る。そうした状況の中で、若きフランチェスコは、洞穴での祈りの最中に神の声を聞き、信仰の生活に目覚めたといわれている。

以来、彼は財産を捨て粗末な衣服を身につけて、ハンセン病者とともに修道士としての生活をはじめた。イエス・キリストの模倣としての「清貧」を徹

底的に実践した彼のもとには、まもなく仲間が集まり、一二〇九年には教皇インノケンティウス三世より修道会設立の許可を受けたとされる。一二二四年、山中で十字架にかけられた天使の姿を見たフランチェスコは、十字架上のイエスと同じ場所に傷（聖痕）を受けたといわれている。その後彼は『太陽の賛歌』を残し、まもなく亡くなった。

フランチェスコの魅力がわかる

『太陽の賛歌』

フランチェスコによる作品としては『太陽の賛歌』が名高い。太陽に「兄弟」、月と星に「姉妹」と呼

びかけながら神への賛美をうたうこの歌は、ラテン語ではなく俗語で書かれており、民衆的な宗教詩の原型として、文学史上でも高く評価されている。

フランチェスコの伝記としては『小さき花（フィオレッティ）』がある。この伝記は彼の死後一〇〇年あまり後に書かれたもので、聖人フランチェスコの姿が素朴な文体で生き生きと描かれている。

環境保護の聖人

また、ジオットをはじめ多くの画家たちがフランチェスコの肖像画を描いている。現代では、フランチェスコの若き日を印象的な音楽にのせて描いた映画『ブラザー・サン シスター・ムーン』（一九七二）、『フランチェスコ』（一九八九）などが、人々にフランチェスコの魅力ある姿を伝えている。

鳥や魚に語りかけたと伝えられるフランチェスコ

は、「環境保護の聖人」として現代でもなお最も重要な聖人のひとりに挙げられる。歴史学者のリン・ホワイトは、環境問題の根本的な原因がユダヤ・キリスト教的な人間観にあると考えたが、キリスト教史の中でも独特な人間観・自然観を展開したフランチェスコを高く評価し、フランチェスコが現代の環境問題を解決するカギを握ると主張している。

ジオットによるフランチェスコの肖像画（小鳥への説教）



第3章

古代から中世までのキリスト教／アツシジのフランチェスコ

イエスが十字架にかけられたときに傷を受けたとされる場所、手や足などに、同じような傷が人為的でなく自然に生じること。

聖痕

修道院

欲望と享樂の生活を捨てて、愛と清さに生きることが、多くの宗教に共通する熱望である。キリスト教でこれを実地に移した運動の一形態が、修道院である。

神への奉仕に身をささげることが理想

この世の財も名声も人間関係も捨て去り、神への奉仕に身をささげることが理想とする傾向は、新約聖書の随所に記述されている。三世紀後半には、エジプトに修道生活の父といわれるアントーニオス（二五一頃～三五六）が登場する。彼は地下墓地や砂漠や山に隠棲して修行生活を送ったといわれる。修道生活は、基本的には、無所有、性的禁欲、隠棲、苦行、神賛美、徳への修練、労働、学問研究といった行為を柱とするが、これらはすべての修道生活に

共通するわけでもないし、最初からあったわけでもない。その意味では、修道生活とひと言でいっても実にさまざまである。不眠、断食、片足立ちなどの苦行が先鋭化したこともある。十数メートルの高さの柱の上で祈り、生活する柱頭行者などといわれる行者も現われた。学問研究に没頭する修道生活もある。かと思えば、中世の女子修道院の修道生活は名ばかりになったこともある。上流階級の未亡人や娘たちは、宗教とは無縁の理由で修道院に入れられたため、しみついた贅沢な暮らしぶりを捨てがたかったからである。

修道会は、元来は隠遁・神賛美・祈りなどの生活を目指していたが、のちには外部世界での説教・教育・社会奉仕といった活動を主とする修道会も現われる。前者を観想修道会（トランプピスト会、カルメル会など）、後者を活動修道会と呼ぶ（フランシスコ会、イエズス会など）。以下では、西方キリスト教の主な修道院を簡単に紹介しておく。

修道院の発展と会派

【ベネディクト会】

西方キリスト教において修道制の礎を築いたのは、ベネディクトゥス（四八〇頃～五四七／五五〇）である。彼は六世紀前半にナポリに近いモンテ・カッシーノに修道院を建てた。彼の定めた戒律は広く普及していき、長らく修道会の規範的規律とされ、現在でも各国で用いられている。ベネディクト会の

修道院はヨーロッパ各地に設立されたが、日本人にとってなじみ深いものは、世界遺産にも登録され、日本人観光客も多く訪れるカンタベリーの聖オーガスティン（IIアウグスティヌス）修道院（遺跡）であろう。

【シトー会、トラピスト会】

一一世紀末、ベネディクトゥスの戒律から逸脱していた修道生活を刷新し、彼の精神に立ち戻って戒律の厳守を目指す修道会がフランスのシトーに設立された。シトー会と名乗るこの会は、その後、全ヨーロッパに広がっていった。ちなみに、ベネディクト会の修道服は黒であったが、彼らはそれを白に変えた。

フランス・ノルマンディーのラ・トラップ修道院は、シトー会の精神をいっそう厳格な方向に改革して新しい会として出発した。それがトラピスト会で

第3章

古代から中世までのキリスト教／修道院

ある。一八九二年に、シトー会が穏健派と厳格派に分かれたとき、トラピスト側は「厳律シトー会」と名乗ることになった。「祈りと労働」の精神を重視するトラピストは開拓者の側面を持ち、農業・牧畜業の技術の普及に貢献することとなる。トラピスト修道院が北海道開拓に貢献したのも、その一例である。

【フランシスコ会、ドミニコ会】

キリスト教会は長い歴史のなかで世俗の制度となり、強い権力を持つようになる。こうした教会のあり方に対して、一二世紀末に各地で「清貧運動」が起る。それは、新約時代の宗教実践を目指す一種の信仰覚醒運動である。一三世紀になると托鉢修道会と呼ばれる修道会が生まれる。それは、多大の資産を抱え込むようになっていった修道院とは逆に、私有財産も修道院財産をも放棄し、喜捨きしやによって生計を立てることを目指す。その代表的修道会が、

アッシジのフランチェスコによるフランシスコ会とドミニクス（一一七〇以降～一二二一）によるドミニコ会である。

【イエズス会】

一六世紀、宗教改革に対抗してカトリック教会内部からも改革の動きが出てきた（P130～131参照）。その最前線に立ったのがイエズス会であって、その創設者がイグナティウス・デ・ロヨラ（一四九一頃～一五五六）であり、発足当初の七名の会員のうちの一人がフランシスコ・ザビエル（一五〇六～一五二）であった。この会の特徴的な活動としては、海外宣教のほかには教育活動をあげることができる。イエズス会が世界各地に創設した教育機関としては、日本の上智大学、韓国・ソウルの西江（ソガン）大学、アメリカのジョージタウン大学、ボストン大学などが有名である。

【カルメル会】

パレスチナのカルメル山で共住制をとっていた修道士たちが西欧に移り、一四世紀にはカルメル会修道会をつくっていた。この会は、一六世紀以降、イエズス会と並ぶ重要な修道会となる。一六世紀のアピラのテレサ（テレジア）や十字架のヨハネらは、この会派に連なる。

【カプチン会】

この会は、フランチェスコの戒律を厳格に守り、清貧に徹することを目標として、フランシスコ会から分離した修道会である。映画にもよく出てくる茶褐色の修道服を着用し、先の尖った頭巾（cappuccio）をかぶる。会の名はこれに由来する。なお、エスプレッソコーヒー、カプチーノ（cappuccino）は、色がカプチン会修道士の服の色と似ていることから名づけられたといわれている。

トラピストバター、クッキー



函館のやや西、渡島当別にトラピスト修道院がある。修道院の現在の土地は肥沃だが、開設時は原野であった。修道士たちは荒地を開拓し、牧業を営み、北海道に酪農と乳製品をもたらした。

第3章

古代から中世までのキリスト教／修道院

千年王国運動

世界は救いようがないほど墮落している。今こそ救世主とともに、この世界に革命を起こして理想郷を建設せねばならない。そうした思想の源流に「ミレニアム」がある。

王国の到来を信じ、すぐに実現させる

西暦二〇〇〇年を迎える頃、「ミレニアム」(millennium)という言葉がいろいろところで登場した。ミレニアムとは歴史の区切りとしての「千年紀」という意味で、「ミレニアム・イヤー」とは新しい千年間の始まりの年だったのである。しかしミレニアムとは本来、キリスト教の「千年王国」(「至福千年」ともいう)を指す言葉だった。

この「千年王国」とは世界が終末を迎える最後の段階、つまり「歴史の終わり」に到来し、最後の審

生き返って、キリストとともに千年の間統治した」に基づくもので、ローマ帝国下で迫害されていた初期キリスト教徒たちの、迫害の終焉しゆうえんと最終的勝利への希望を反映したものと考えられている。

千年王国運動とは何か

千年王国運動とは、千年王国の到来を信じ、今すぐにもそれを実現させようという運動である。千年王国運動の信奉者たちは、この世をサタンに支配され墮落しきった世界だとみなす。これは今まさにサタンとの最後の戦いが始まっており、世界が減ぶ寸前にあるということである。しかし、世界が墮落し滅ぶ寸前にあるというこの事実は同時に、キリストの再臨さいりんと千年王国の到来が間近であることの証拠でもある。千年王国運動の信奉者たちは、現在をそのような「歴史の終わり」の時代だと信じ、再臨さいりんの

判までの千年間続くことされる地上の理想郷のことである。その前段階として、神に対するサタンの軍勢の最終決戦を意味する、世界の決定的な墮落とキリスト教徒迫害の時代(「大艱難」だいかんなんの時代)がある。しかし再臨さいりんしたキリスト(救世主きうせしゅ)によってサタンは封じられ、殉教したキリスト教徒たちは復活させられて、キリストが統治する千年王国の住人となるのである。千年王国があくまで地上の王国であり、あの世の天国とは別のものであることには注意が必要だろう。こうした千年王国説は紀元一世紀に成立したと見られる「ヨハネの黙示録」20章(「彼らは

キリストとともに世界の邪悪を一扫し、千年王国を実現させてその住人になることを目指すのである。

千年王国運動は単なる現状の改善を目指すものではなく、完璧な世界の実現を信じる運動である。それは当事者たちにとって、歴史上一回限りの、至上の重要性を持った戦いである。千年王国運動とはこのように、世界そのものの根本的な変革を目指す一種の救世運動であり、革命運動なのである。

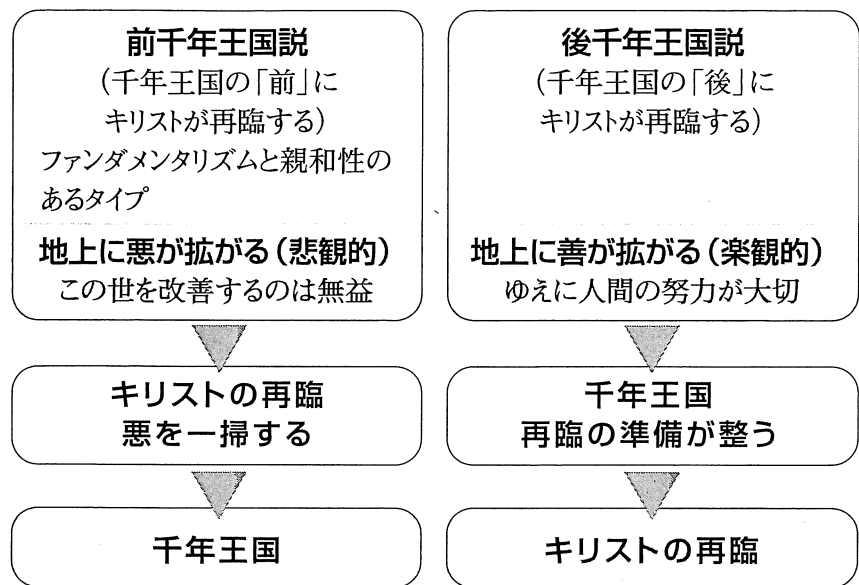
中世の千年王国運動

千年王国運動が最も活発になったのは、一一世紀から一六世紀の中世ヨーロッパである。その背景には商業の発達などによる伝統的社會基盤の変容、教會の腐敗による信賴の喪失といった社會不安があった。歴史学者ノーマン・コーン(一九一五―二〇〇七)によれば、千年王国運動の主な担い手は、社會

第3章

古代から中世までのキリスト教／千年王国運動

【「千年王国」と「キリストの再臨」の関係…2つの考え方】



現代にも引き継がれる千年王国の思想

千年王国の思想は、中世以降も脈々と引き継がれている。一九世紀初頭にはフランス革命とそれに続くナポレオン戦争の混乱を背景に「終末」の気分が蔓延し、キリストの再臨を待ち望む人々が現われた。現在でもアメリカのファンダメンタリスト(P 176 177 参照)の一部には、千年王国到来を告げる最終戦争としての「核戦争を待望する人々」がいる。千年王国(運動)はこのようにもともとキリスト教の言葉だが、そこから広げて地上の最終的な理想郷(を実現しようという運動)という意味でも使われる。キリスト教以外の宗教による同様の運動はもちろん、世俗のユートピア思想やマルクス主義に基づく社会主義革命なども、広い意味での千年王国運動といえるだろう。

の末端に生きる貧民たちであった。彼らは単に貧しいだけでなく、社会に安定した基盤を持ってない、社会不安に最も傷つきやすい人々だった。

一方、千年王国運動の指導者となったのは多くの場合、説教師や元司祭など、教会の主流から離れた知識階級であった。彼らの多くは、自分たちが神に選ばれた救世主^{メシア}、あるいは救世主の到来を告げる終末の預言者であることを心から信じていた。彼らを単なる詐欺師だっただと考えるのは運動の性格を大きく見間違えることになるだろう。神の救いを最も必要とする人々、しかし腐敗した教会による救いを信じることができない人々は、指導者たちの確信に満ちた信念に強くひきつけられ、運動に参加した。彼らはそれによって現実の生活苦や不安から解放され、腐敗した世界を正すという使命感、聖なるものに連なっている安心感、訪れるべき理想世界への希望、

などを手に入れたのである。

千年王国運動の信奉者たちは、神に定められた使命に従う聖なる民として、自分たちの絶対的な正義を信じた。彼らはサタンの軍勢に対する最後の決戦におもむく神の軍勢であった。教皇や聖職者、ユダヤ人、為政者など彼らが搾取者とみなす人々、さらには自分たちの集団に属さないすべての人々はサタンに仕える者であり、神の王国のために滅ぼすべき敵となった。彼らの行為はすべて神の下にあり、したがって略奪や殺人など、一般的には反道徳的ないかなる行為であっても、罪ではないどころか聖なる行為とみなされた。

このように、千年王国運動は純粹に善の実現を目指す、信仰心に満ちた運動であったと同時に、純粹であるがゆえに排他的で残酷・無慈悲な側面を持つた運動でもあった。

十字軍

十字軍とは、ローマ教皇によって呼びかけられ、参加者に「贖宥」が約束され、十字をまとって行なわれる軍事遠征をいう。だが、彼らはいったい何のために戦ったのだろうか？

十字軍は聖なる戦い？

十字軍（クルセード）とは、主に、一一世紀末からキリスト教徒たちによって繰り返されたパレスチナ地方への軍事遠征、ないしはそれに参加した人々のことを指す。

ただし他にも、「北の十字軍」と総称されるバルト海域の異教徒への十字軍もあった。十字軍とはさしあたり、ローマ教皇による呼びかけと支援がなされ、参加者には贖宥（罪の償いの免除）が約束され、十字をまとって戦うものと定義することもできる。

を増して領土の拡大を行なおうとした。やがてイスラームは小アジアのほぼ全体を掌握して、東ローマ帝国を脅かすようになっていった。

そこで東ローマ皇帝のアレクシオス一世は、ローマ教皇に援軍の要請をせざるを得なくなった。それを受けてローマ教皇ウルバヌス二世は、クレルモン会議で聖地回復をアピールし、第一回十字軍（一〇九六―九九）を結成するに至ったのである。

一〇九九年にはいったんエルサレムを奪回し、エルサレム王国などの十字軍国家が建設され、 Templar 騎士団やヨハネ騎士団などの騎士修道会も創設された。しかしさまざまな場所から兵士を集めてつくった十字軍は、組織形態のうえで不十分な点も多く、すぐにイスラーム勢力の巻き返しによって危機に陥った。イスラーム教徒たちは十字軍との戦いを「聖戦」(ジハード)とみなして、多くが戦闘に参加したのである。

この十字軍という言葉は、今でも欧米諸国では「悪に対する善の戦い」を意味する言葉として比喩的に用いられることもある。だがイスラーム文化圏にとつては、十字軍とはキリスト教徒たちによってなされた虐殺や略奪のいまわしい記憶でもあり、この語を不用意に用いることに対する反発は今でも大きい。

十字軍の誕生と繰り返された遠征

ここではパレスチナ地方への十字軍に話を絞ることにしよう。

イスラーム教徒は七世紀半ば以降から急激に勢力を伸ばして、第二回十字軍（一一四七―四九）や第三回十字軍（一一八九―九二）が結成されたが、いずれも失敗してしまふ。第四回十字軍（一二〇二―〇四）がインノケンティウス三世によって結成されたが、それは途中から聖地奪回という当初の目的から離れてコンスタンティノポリスの征服・略奪となり、本来は援護すべきであった東ローマ帝国を侵略したもとなつてしまった。

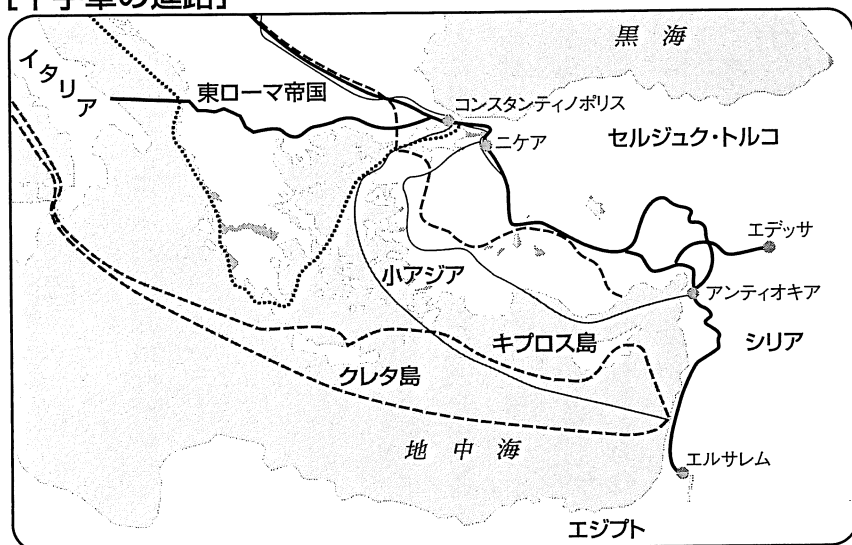
こうして十字軍の元来の理念は形骸化しながらも、第五回十字軍（一二二八―二九）、第六回十字軍（一二四八―五四）と繰り返され、そして第七回十字軍（一二七〇）でもって、この歴史は終わりとなる（全八回とする数え方もある）。

十字軍の功罪

一〇九六年から一二七〇年までの約二〇〇年間に

騎士たちによる修道会で、肉と霊の両面において悪と戦う者とされ、聖地巡礼の護衛・援助などを行なった。代表的なものとしてヨハネ騎士団、Templar 騎士団、ドイツ騎士団などがあげられる。

[十字軍の進路]



—— 第1回十字軍(1096-99) - - - - 第3回十字軍(1189-92)
 —— 第2回十字軍(1147-49) ······ 第4回十字軍(1202-04)

第1回十字軍(1096-99)	エルサレム陥落に成功し、エルサレム王国を建設。
第2回十字軍(1147-49)	イスラームの勢力回復と十字軍内部の乱れにより失敗。
第3回十字軍(1189-92)	聖地回復はならず、イギリス王がサラディンと講和を結んで終了。
第4回十字軍(1202-04)	本来救援すべきだった東ローマを占領し、ラテン帝国を建てる。
第5回十字軍(1228-29)	フリードリヒ2世によって行なわれ、一時的にエルサレムを奪還。
第6回十字軍(1248-54)	エジプトに向かうものの、提唱者のルイ9世が捕虜になり失敗。
第7回十字軍(1270)	ルイ9世によって行なわれるが、途中で病死して挫折。

結局、十字軍は、聖地エルサレムの回復という本来の目的を果たせぬまま、そしてキリスト教徒とイスラーム教徒の間とローマ教会と東方教会の間にしこりを残したまま、幕を閉じた。

七回も繰り返されたこの十字軍結成の理由は、表面は、イスラーム教徒によって占領された聖地エルサレムの奪回である。確かに純粋に宗教的な情熱によって参加した者も多かったが、

しかし全体としてみると、政治的な野心や名誉心、あるいは冒険心や戦利品獲得、貿易の利権といった動機など、さまざまな思いや狙いが交錯したものであった。

そもそもウルバヌス二世が第一回十字軍を結成させたのは、セルジューク・トルコを小アジアから追い払う援兵を送れば東方教会がローマの主権を認め、結果としてキリスト教国の統一が回復されるだろうと期待したからであった。十字軍に参加した者には贖宥も約束され、慢性的な生活不安のなかで生きることを余儀なくされていた貧しい人々にとっては魅力的な「巡礼」でもあった。しかし霊のおよび物

質的な報酬を目当てに集まってきた人々のなかには、軍役に就くにはあまりに不適合な貧民や無法者も大勢おり、装備もばらばらで、家財道具を荷車に積んで家族ぐるみで参加する例もあった。実際の十字軍は、すべてがしかるべき訓練を受けて十分な装備を持った兵士のみによる規律ある軍事行動ではなく、およそ集団としての秩序が保たれていない部分もあったのである。

結果的にこれら一連の十字軍は、都市の発達や貨幣経済への転換など、後のヨーロッパ文化の発展につながったとも考えられる。しかし他宗教に対する敵視や残虐行為は、決して正当化されうるものではない。現在の国際紛争を考えるうえでも、宗教と連関した戦争行為としての十字軍は、常に批判的に振り返らなければならない。

異端審問と魔女狩り

十字軍と並んで、異端審問や魔女狩りも、キリスト教史の負の側面である。異端や魔女だとみなされると、迫害され残酷な刑に処せられた。

正統以外の教義を 信じる人々を処罰する

異端審問というのは、中世のキリスト教世界で盛んに行なわれた、正統以外の教義を信じる人々を裁判にかけて処罰するシステムである。

「異端」という言葉は二世紀頃からすでにあったが、異端審問という制度が設けられたのは一二世紀後半になってからのことである。

一二世紀、マニ教に起源をもち善悪二元論の傾向をもつカタリ派や、清貧の生活をして当時の聖職者の行状を批判するワルドー派の人々が急増し、それ

までの教会組織の脅威となった。彼らは「異端」として迫害されたが、それでも彼らの勢力を無視することができなくなってきたため、信仰にかかわる問題を審問し、広く異端の殲滅を目的とする制度が形成されるようになったのである。

最初は一一八四年のヴェローナ会議で教皇ルキウス三世によって異端審問制度が制度化され、司教が担当地域を巡回して異端の容疑者を探すことなどが定められた。

さらに一二一五年の第四ラテラノ公会議で、異端審問の手続きが定められ、また神聖ローマの皇帝で

あったフリードリヒ二世も異端審問を支援する方針を決め、異端者を火刑に処するなどの条項がつけられるに至った。そして一二三二年には教皇グレゴリウス九世が教皇に直属の異端審問裁判所を新設して、最初はドミニコ会、後にフランシスコ会などの

修道士に審問官の仕事を任せるようにした。やがて一四世紀になると、ベルナルド・ギーによって異端審問官の手引きが書かれるなどして、審問の方法が



空飛ぶ魔女。前が男で後が女。このように魔女は必ずしも女とは限らない。

より具体的に定められもした。異端審問裁判所は、司法や行政の面でも重要な機関となっていった。こうした異端審問という制度がキリスト教史の負の側面として語られるのは、ずさんで恣意的な訴訟手続きや、財産没収、拷問や火刑といった残酷な刑罰が横行したことなどにもよる。

一四一五年のコンスタンツ公会議では、すでに死んでいる哲学者で神学者のウィクリフ（一二三〇〜八四）があらためて異端として断罪され、著書が焼かれ、墓も暴かれて骨が焚かれた。一六世紀のスペインでは君主が教皇の許可を得て異端審問所を設置した。それはやがて、ユダヤ教徒やイスラーム教徒に対する迫害にもつながっていった。

魔女狩りとは何だったのか

いわゆる「魔女狩り」の対象となった魔女とは、

悪魔と契約して特別な力を得て、人間や社会に対して災いをもたらす存在と理解されていた。魔女として告発され捕らえられた者のなかには男性もいたが、しかし多くは、貧しくて教養がなく、また友人も少なかった女性であったといわれている。

捕らえられるとさまざまな拷問を受け、ひたすら自白を強要された。拷問に耐えて自白を拒めば、それができるのは悪魔の力を持っているからだといわれています。激しい拷問を受ける。だが自白をすれば火刑や絞首刑や溺死刑などの刑に処せられた。

一五世紀にドミニコ会士J・シユプレンガーとH・クラマーによる『魔女への鉄槌』^{てつづ}が教皇の推薦文付きで各国に配布され、魔女裁判の教科書としてそれを後押しした。犠牲者の数は、ヨーロッパ全土で数十万人とも数百万人ともいわれるが、せいぜい四万人程度であったという説もある。

こうした「魔女狩り」という行為が繰り返された理由としては、一種の集団ヒステリーだとされることもあれば、あるいは自然災害や疫病の発生、家畜の病気や農作物の不作など、やり場のない不安や不満が封建社会の女性蔑視とあいまって行なわれるようになったと説明されたりもする。

だが当然ながら、これらと似た環境にあった地球上のすべての社会で必ず魔女狩りのようなことが行なわれたわけではない。ルターやツヴィングリなど、後世に大きな影響を与えた神学者も魔女の存在やその迫害を肯定するような文章を残しているが、魔女狩りそのものの発生原因や背景には、キリスト教以前の魔女伝承や、その他の文化的背景、および当時の社会的環境が複雑に絡み合っていると考えねばならない。